

たか
高

はし
橋

とおる
徹

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第106号
学位授与年月日	平成13年3月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 社会学専攻
学位論文題目	ニクラス・ルーマンにおける「理論」と「歴史」 ——知識社会学研究の方法と内実——
論文審査委員	(主査) 教授 正村 俊之 教授 高城 和義 教授 吉原 直樹 教授 長谷川 公一 教授 原 純輔 助教授 永井 彰

論文内容の要旨

本論の目的は、現代ドイツの社会理論家ニクラス・ルーマンの仕事を次の2つの点で検討することである。第1に、1980年代に入って本格的に公表されはじめた彼の歴史的な知識社会学研究の内実を明らかにすることである。第2に、そうした歴史的な知識社会学的研究がいかなる方法論的な枠組みのもとでおこなわれているのかを明らかにすることである。

まず第1の課題について、本論では1980年代前半に発表された事例研究を中心に検討することにしたい。この時期に特に着目するのは、そうした事例研究があいついで公表されはじめたのがこの時期だからである。さらに、この時期は、ルーマンの社会システム理論研究におけるひとつの展開期となっており、理論研究と事例研究との関連を検討するにも格好の時期だからである。したがって、本論では、理論研究と知識社会学的な事例研究との関連にも注意を配りながら検討を進めることにする。

第2の課題については、事例研究とともに発表されている方法論に関わる論文を中心に検討をおこなう。その際、第1の課題と同様に、ここでも彼の社会システム理論と知識社会学的な事例研究との関連に着目し、理論的な諸概念と知識社会学的な分析とがどのように関連しているのかに注意を払いながら検討を進めたい。

したがって、本論のテーマは、ルーマンの知識社会学的研究の内実とその方法について検討

をおこなうことであり、それを特に80年代前半の時期を中心として理論研究との関連に注意を払いながらおこなうことである。本論で筆者が、ルーマンの研究営為の中で彼の知識社会学を取りあげるのは、これまでのルーマン研究においてこの領域における彼の仕事がほとんど取りあげられてこなかったからである。しかしながら、かりにもルーマン理論が、経験科学の一分野である社会学の理論である以上、なんらかの経験的事例をレファレンスとしてその理論彫琢がおこなわれてきたはずであり、したがってその理論を理解するうえでも、本論で取りあげる彼の事例研究を看過しておくことはできないものと考えからである。したがって、本論では、知識社会的な研究をルーマンの研究営為における第2の軸と位置づけ、その方法と内実の検討を中心としつつも、あわせて理論的な研究との関連に着目することにしたい。

以上述べてきた本論の観点をより具体的に示すと、次のようになる。まず、本論では、ルーマンにおける①社会システム理論の独自の展開、および②ドイツで蓄積されている歴史的意味論の研究に触発されつつも、それへの批判的な距離をとって展開されている歴史的な知識社会学研究のそれぞれを、ルーマンの研究営為における中心軸をなすものと位置づける。

つまり、本論のテーマは、第2軸の方法と内実の検討を中心としつつ、あわせて両軸の関連に注意を払うことだといえる。解明されるべき両軸の連関をより特定して言えば、ルーマンの知識社会学研究が社会システム理論の枠組みによって可能となっていると同時に、その社会システム理論の基本概念自体がこの研究においてテーマ化されている近代の社会変動と関連した歴史的性格を帯びている、ということである。

先にも述べたように、筆者は、第1の軸、すなわちルーマンの研究の中心軸である社会システム理論の展開が1982年のオートポイエーシス概念の導入をもってひとつの展開点をなしていること、さらに第2の軸である歴史的な知識社会学研究が1980年の『社会構造とゼマンティック』第1巻の刊行をもって本格的に開始されていることに着目し、1980年代初頭のこの時期がルーマンの研究の展開においてきわめて重要な時期であったとみている。筆者の調査によれば、ルーマンは、1980年のマトウラーナ／ヴァレラ『オートポイエーシスと認知』の刊行直後から頻繁に同書に言及し、様々なコンテキストでオートポイエーシスの論理を社会理論研究の論理として展開しようと試みている。しかも、そうした言及は、理論研究に位置づけられる文献にとどまらず、事例研究と位置づけられる文献においても数多く見いだされている。ルーマンにあって、彼らに言及するということは、自己言及的システムの考え方、およびそこから派生的諸帰結を、さらに踏み込んで当該テーマに適用することを試みているということであり、理論的展開を図ろうとするシグナルなのである。したがって、マトウラーナとヴァレラの著作への言及にみられるそうした事実は、ルーマンがもっぱら理論研究のコンテキストのみならず、事例研究においても、独自の社会システム理論の展開を図っていたことを示している。本論では、これまで光を当てられて来なかったこうした側面を取りあげ、具体的にその経緯を解明したい。

ある研究者の指摘によれば、ルーマンの著作において最初に自己言及概念^{ゼルフスト・レファレンツ}が登場するのが『社会学的啓蒙』第2巻（1975年）所収の「システム理論、進化理論、コミュニケーション理論」であり、その後の1970年代後半にルーマン理論の展開の大きな山場があったとされる。これに対して、すでに述べたように、本論で中心的に取りあげる1980年代前半は、オートポイエーシス概念の導入という理論的展開がみられるのみならず、歴史的—知識社会学研究が本格的に公表されはじめた時期にあたり、両者の関連を検討するには格好の時期にあたる。

本論の各章で主に参照するメインテキストは以下のとおりである。第1軸にあたる理論編については、1984年の『社会システム理論』をメインテキストとし、第2軸の事例編については第1～4章までを1980年の『社会構造とゼマンティック』第1巻、第5章は1982年の『情熱としての愛』をメインテキストとする。

各章においておこなう検討は次の通りである。

第1章「ルーマン知識社会学の基本構造」では、歴史家たちによる歴史的意味論研究との関連をふまえながら、社会システム理論研究に隠れて取りあげられることの少なかったルーマンの歴史的な知識社会学研究の方法論的枠組みを明らかにしたい。それにあたって、まず本章の問題意識を提示し(第1節)、次いでラインハルト・コゼレックらによって進められた歴史的意味論研究の方法論や問題関心を簡単に振り返り、ルーマンの知識社会学研究の問題意識を明らかにする(第2節)。続いてルーマン自身の知識社会学研究の方法論の検討に入る。ここでは、ルーマンの研究にとって基本概念となる複合性、ゼマンティック、社会分化構造という3つの中心軸をまず明らかにし、さらに社会—文化的進化の観点からゼマンティック変動をルーマンがどのように捉えているかを明らかにする。これらの検討の中で、ルーマンが西欧近代におけるゼマンティックの変動にどのような仮説をおいているかを明らかにする(第3節)。以上の検討を受けて、ルーマンの知識社会学研究が、歴史的研究とどのような関わりを持つかを明らかにし、また彼自身の社会学研究プロジェクトを象徴的に表す「社会学的啓蒙」との関連を指摘する(第4節)。

第1章には、方法論の検討を補足するために、2つの補論が付されている。補論1「ルーマン知識社会学とパーソンズ、ハーバーマスとの関連」では、タルコット・パーソンズの文化システム論を取りあげ、その概要を振り返った後、ルーマンがこのパーソンズの文化システム論に対してどのような立場をとっているかを明らかにする。ルーマンの問題意識を端的に示すのであれば、歴史意味論の研究成果に接続しうるためにはまず理論的な負荷の少ないかたちでゼマンティックと社会構造の関係を定式化することだと言える。さらにユルゲン・ハーバーマスとの関連で着目しておきたいのが、いわゆるルーマン＝ハーバーマス論争においておこなわれたやりとりである。ハーバーマスは、社会の危機は社会の文化的同一性にかかわる危機であると把握したうえで、ルーマンの一般的なシステム理論的枠組みをもって、そうした文化的同一性にかかわる解釈体系の変動をいかにして説明しうるのかという問いを投げかけている。こうしてハーバーマスによって投げかけられた問いは、第1章の検討でその基本的な枠組みを明らかにしたルーマンの知識社会学研究にも刺激をもたらしたのではないかというのが筆者の考えである。第1章ではさらに補論2「ゼマンティック／社会構造—関係をめぐって」において、ウルス・シュテヘリの議論を検討している。シュテヘリは、ルーマン研究者の中でもゼマンティックの問題に熱心に取り組んでいるほとんど唯一の研究者であり、その論文におけるゼマンティックと社会構造の関係に関する議論も本論の視点からも興味深いものとなっている。シュテヘリの議論は、ルーマンによるゼマンティックと社会構造の関係の把握がやや非対称的な関係に偏っており、そのポテンシャルを十分に展開していないというもので、精神分析における「事後性」概念を引き合いに出しつつ、事後的観察がシステムに対して構成的に作用する可能性を提起し、ルーマンにおいても同様の可能性を見いだすことができることを指摘している。

第2章「ゼマンティックとしての近代初期人間学」からは、事例研究の検討に入る。取りあげるのは『社会構造とゼマンティック』第1巻に収録されている「近代初期人間学——社会の進化

問題に対する理論技術的解決」における17世紀フランスの人間学に関するルーマンの分析である。本章ではこの分析を取りあげ、人間学の思想変動に関するルーマンの分析の特徴、およびその含意を検討する。手順としてはまず、これまで看過されてきたルーマンの歴史への関心を取りあげ（第1節）、ルーマンによる近代初期人間学の分析の検討に移る。ルーマンの議論によれば、17世紀の半ば頃を境に、宗教的見地から非難されてきた自己愛が、人間の自己準拠の根拠として次第に認知されはじめ、その後、社会関係の基盤と位置づけられるまでに至る。自己愛の問題は情念の問題の一部であり、さらにこの情念の問題は人間の様々な不安の問題へと結びついている。政治的権勢に対する欲望、物への欲望、好奇心などはとどまることを知らぬ人間の情念の諸相であり、これが次第に機能分化しはじめた社会の各領域における駆動因として包摂されてゆくことになる。人間の情念が肯定される方向へ向かったゼマンティック的転換は、そのような人間の機能的分化への包摂と関連しているというのがルーマンの議論の骨子である（第2節）。第2章では続いて、ゼマンティック変動の分析視点に関する若干の考察を挟んで（第3節）、本章で検討してきた人間学的発想の形式と社会理論および社会システム理論との関係を検討している（第4節）。

第3章「相互作用ゼマンティックの変動」では、『社会構造とゼマンティック』第1巻に収録されている「上層階層における相互作用—17・18世紀におけるそのゼマンティック的再編について」を取りあげて相互作用ゼマンティックの変動に関する分析を検討している。本章ではまず、全体社会の階層的分化から機能的分化への移行というゼマンティック変動の分析におけるルーマンの基本枠組みとの関連で相互作用ゼマンティックがどのような位置価値を持つか明らかにしている（第1節）。続いて、第2章との関連を受けて、相互作用にかかわる人間学的観念の変動に関するルーマンの分析を検討した後（第2節）、相互作用ゼマンティックそのものの変動をルーマンがどのように捉えているかを明らかにしている。相互作用ゼマンティックの変動については、前転換期、転換期とにわけてその経緯を論じた。ルーマンの視点は、基本的に人と人との間の社会性が次第に深まっていく様子を捉えることにあり、相互作用ゼマンティックの変動もそうした深まりを反映するものとして把握されている。他方で、そうした社会性の深化をともなった相互作用ゼマンティックの変動がパーソナルな関係において進展してゆくなかで、そうした相互作用が次第に諸機能システムから分化してゆく様子が把握されている（第3節）。最後に、そうした相互作用の分化のコンテクストに秘密結社の事例を見いだすルーマンの指摘を検討し、パーソナルな関係として、その社会性を深化しはじめた相互作用のその後の展開の一例を取りあげている（第4節）。

第4章「理論的中間考察—社会システムの時間性」では、「理論的中間考察」という位置づけで時間ゼマンティックを取りあげている。テキストは、『社会構造とゼマンティック』第1巻に収録されている「複合性の時間化：近代的時間概念のゼマンティックについて」である。第1章の検討において、複合性がルーマンのゼマンティック変動の分析枠組みにおいて重要な位置にあることを明らかにしているが、時間ゼマンティックはこの複合性の問題に密接にかかわっている。なぜなら、諸行為の時間的編成の問題は、まさに複合性編成の問題そのものだからである。そこで、本章では時間ゼマンティックがもつ社会システム理論との理論内在的な関係を明らかにするとともに、意味の3次元の分化とゼマンティック変動との関連について検討する。検討の最初にまず、時間ゼマンティックの位置づけとして、いま述べたような時間ゼマンティックの重要性を指摘する（第1節）。続いて、ルーマン理論において社会システムのオペレーションとされ

るコミュニケーションと、社会構造の基本形態を成す分化が、時間ゼマンティックとどのように関わるかを明らかにする。3者の関係を簡単に述べれば、分化はまずコミュニケーションの一定の様式化によって成立し、コミュニケーションはそのような分化の成立によって独自の複合性を構築してゆくことができるようになる。コミュニケーションにおける複合性の構築様式が更新されると社会的過程の記述にかかわる時間ゼマンティックに変化が生じ、それが翻ってその後のコミュニケーションの編成に影響を与えるようになる。他方、分化は新たな複合性の構築を可能にする。そうした新しい可能性もまた、時間ゼマンティックに影響を与え、これがまた分化そのものに作用するという関係をなしている（第2節）。ルーマン理論において意味は諸可能性の処理形式である。この処理形式としての意味は、事象次元・時間次元・社会的次元の3つの次元がそれぞれ区別されている。ゼマンティック変動の問題においてこの3つの次元が持つ重要性は、この3つの次元がいくつかのゼマンティック変動を位置づける視点を提供する点にある。例えば、進歩というゼマンティックは、事象次元と時間次元とが結合したゼマンティックであり、人間学における本質論的な人間規定は、事象次元と社会的次元が結合したゼマンティックであると位置づけられる。さらに重要なことは、このようにゼマンティックを特徴づけうる3つの次元そのものが歴史的に分化してきたことをルーマンが指摘している点である。意味概念に関する議論は、ルーマンの議論においてある意味もっとも抽象的な議論なのであるが、この意味の3つの次元からしてひとつの歴史的所産であることが確認できるのは本論の視点からも重要である（第3節）。

第5章「社会システムのコード化におけるコミュニケーション・メディアとゼマンティック—愛の関係を事例として」では、ルーマンの社会システム理論研究の成果と知識社会学的研究の成果が豊かに結びついている『情熱としての愛—親密さのコード化』（1982年）を取りあげる。ここでは、愛の関係におけるコミュニケーションのコード化を、社会システムの機能的分化の歴史的条件として取りあげる。本章では、まず最初に本章のテーマを示し（第1節）、次いで社会システムの分化の条件を考えるうえで基本的な論点であるコミュニケーションの自己言及を取りあげ、このコミュニケーションの自己言及的な再生産プロセスをいままで以上に踏み込んで定式化するために導入されたのがオートポイエーシス概念であることを指摘する（第2節）。続いて、愛のゼマンティックの検討に入り、近代西欧的恋愛における情熱の問題、情熱を駆動因とする恋愛関係に立ち現れる社会的不確実性、さらにそのような不確実な関係において機能するコミュニケーション・メディアとしての愛、そしてこの愛のメディアを補完する個性性ゼマンティックを順次取りあげ、愛のコミュニケーション・システムが分出する様子を描き出す（第3節）。それを受けて最後に、機能的分化の諸条件をコミュニケーション・システムの分化の条件を挙示することによって明らかにする（第4節）。

第5章には、『社会構造とゼマンティック』第1巻の「自己言及とバイナリー図式化」をもとに、自己言及とバイナリー的なコード化について論じた補論3「自己言及とバイナリーコード」を付している。ここでは、ルーマンが挙げているいくつかの例（真／偽、誠実／不誠実等）に沿って、自己言及性とバイナリー図式の分化を、ルーマンが示す歴史的なコンテクストとともに明らかにしている。さらに、バイナリー図式の持つ諸機能（短絡の回避、接続の確実化）について説明している。こうした議論により、第5章において中心的な論点となったコミュニケーションのコード化に関するルーマンの議論をさらに補足的に検討している。

最後に本論全体に関わる補論4を付した。補論4「オートポイエーシス概念の実質的導入お

よびゼマンティックとしての『福祉』では、『福祉国家における政治理論』（1981年）を取りあげている。本論の視点から取りあげておきたいこの著作の意義は、次の2点である。第1に、「福祉」が自己言及的政治システムのゼマンティックと位置づけられている点でゼマンティック分析の現代版であること。なぜなら、自己言及的システムとしての政治システムは、それ自体のうちにみずからのオペレーションを決定する十分な手がかりをみいだすことができず、よってその外部にそれを求めなければならないからである。現代の政治システムにとって、人々によって提示される様々な生活問題にかかわる諸要求が、その有力な手がかりとなっている。つまり、自己言及的システムとしての政治は、その未規定性を除去するために様々な諸要求を政策的に吸収することになる（福祉政策はその代表的なもののひとつである）。ところが、自己言及的システムの未規定性は、際限がないため、政治システムが環境から取り入れる諸要求の範囲も際限なく拡大してゆく傾向を帯びる。この著作が刊行された当時さかんに議論されていた「福祉国家の危機」にこの理論的把握は結びついている（第1節）。さらに本補論において取りあげておきたい第2の点は、1982年の明示的なオートポイエーシス導入の直前に位置するこの著作においてすでに、政治システムの定式化において実質的にオートポイエーシス概念が登場していることが確認しうることである。

終章「ルーマン知識社会学の方法と歴史」では、本論全体をとおしておこなってきた検討をふまえて、ルーマンの知識社会学研究の方法論に関する知見をあらためて整理し、さらにルーマン知識社会学と歴史との関連について考察している。方法に関しては、ここまで縷々述べたとおりであり、歴史との関連については次の2点で論じている。まず、ルーマンの方法論が文化史的な研究においてどのような独自性を主張しているのかということ、さらにルーマンの研究自体がひとつの歴史的所産であるという点である。前者についてルーマンが述べるのは、文化史的研究において従来しばしば取られてきた著者・学派・潮流のような概念によって文化史の変動を記述する方法に対して、それとは違った方法論を提起しているということである。さらに、ルーマン自身の議論を検討してみると、みずからの理論はその理論自体の運命についても記述しうるものでなければならないと考えている。したがって、みずからの理論の歴史性をもその視野の中に収めうることをその理論に課しているといえる。筆者の検討によれば、そもそもルーマンが『社会構造とゼマンティック』第2巻の中で、社会学の根本問題を「社会秩序はいかにして可能か」と定式化していること自体が、高度な複合性を保持する社会においてはじめて可能となっているのである。さらに、社会学における一般理論の探究もまた、専門分化の一定の段階に位置するものである。こうしたことを考えあわせると、ルーマン自身の理論もまた社会のある歴史的条件のもとにあることが明らかになる。本論のタイトルのうちにある「理論と歴史」はこうして、歴史を理論が記述するとともに、理論が歴史のうちにあるというこの往還が明らかになることにおいて十全な私たちでその意味が明らかになるのである。

論文審査結果の要旨

本論文は、「オートポイエーシス論」という、1980年代におけるルーマン理論の展開を視野に収めながら、この時期に本格的に開始されたルーマンの知識社会学的研究の内容と方法を解明しようとするものである。「機能構造主義」として出発したルーマンの社会システム理論は、

80年代に入って、マツラナとバレラの「オートポイエーシス論」を導入することによって新たな段階を迎えたが、論者は、同時期に行われたルーマンの知識社会学的研究を子細に検討するとともに、ルーマン理論の展開という広いコンテクストのなかでルーマンの知識社会学的研究がもつ理論的意義を見極めようとしている。全体は、序章と終章を含む全七章からなる。

序章「本論の課題——ルーマンにおける第2の軸」では、本論文の課題と先行研究との関係が簡潔に述べられる。すなわち、本論文の課題は、①「オートポイエーシス論の導入」と、②17・8世紀のゼマンティック変動を主題にした「知識社会学的研究の遂行」という二つの側面を連関づけながら、ルーマンの知識社会学的研究の内実と方法を明らかにすることにあり、シュテヘリの研究など一部の例外を除くと、ルーマンの知識社会学的研究に焦点をあてた研究はこれまで存在してこなかったことが指摘される。

第一章「ルーマン知識社会学の方法」では、コゼレックらの概念史研究との対比をつうじて、知識社会学的研究の方法的枠組となるルーマン理論の骨子が素描される。「複合性・ゼマンティック・社会構造」に関するルーマンの基本仮説が提示され、近代社会におけるゼマンティックが複合性の処理圧力の増大をつうじて伝統的なゼマンティックから社会の機能分化に対応したゼマンティックに変動したことが述べられる。

第一章には、二つの補論が付されており、補論1「ルーマンの知識社会学とパーソンズ、ハーバーマスとの関連」では、ルーマンの知識社会学的研究に対して及ぼしたパーソンズやハーバーマスの影響が吟味される。そして、補論2「ゼマンティック／社会構造—関係をめぐって」では、本論文の先行研究となるシュテヘリの論文に言及しながら、ルーマン理論の新たな展開の可能性が探られる。

以上の基本枠組を踏まえて、続く三章では、17・8世紀におけるゼマンティック変動が各テーマに即して論述される。

まず、第二章「ゼマンティックとしての近代初期人間学」では、近代初期人間学に関するルーマンの分析が取り上げられ、自己愛や情念のゼマンティックが近代社会の機能的分化と対応しながら変動したことが説明される。その際、論者は、ゼマンティックの分析に使用されている「三極関係」に着目し、この「三極関係」がルーマンの社会システム理論に内在している「自己言及的論理」と「バイナリー図式」を組み合わせたものであること、したがってゼマンティック変動の分析とルーマンの社会システム理論の間には一定の論理的な平行関係が見られることを明らかにする。さらにここから、ルーマンにおける「オートポイエーシス論」の導入が近代社会に対する知識社会学的な分析に裏打ちされたものであることを示唆する。

第三章「相互作用ゼマンティックの変動」では、前章と同様、17・8世紀に生じた相互作用ゼマンティックの変動に関するルーマンの分析が俎上に載せられ、人間学的観念の変動と関連づけられながら論じられる。上層階層の相互作用と相互作用ゼマンティックの変化が階層分化から機能分化への転換に照応しており、その変化の末に社交や秘密結社のような、日常的コミュニケーションから独立した相互作用の形式が成立するというルーマンの考え方が描き出される。そして、論者は、こうした近代社会のなかに「ダブル・コンティンジェンシーの論理」を根幹に据えたルーマンの社会システム理論を支える現実的条件を見出し、ルーマンの知識社会学研究と社会システム理論の間に内在的連関があることを指摘する。

第四章「理論的中間考察—社会システムの時間性」は中間考察としての性格を有し、社会の分化構造とゼマンティックを媒介する複合性の問題が時間ゼマンティックとの関連のなかで検討さ

れる。ルーマンに依拠しながら、中世から近代にかけて生じた時間ゼマンティックの変動が概説され、そのうえで「コミュニケーション・分化・時間ゼマンティック」の関係が考察される。そして、「事象次元・時間次元・社会次元」という、意味を構成する三つの次元の区別が歴史的所産であることが示される。

第五章「社会システムのコード化におけるコミュニケーション・メディアとゼマンティック愛の関係を事例として」では、社会システム理論と知識社会学的研究の成果が融合した事例として、愛に関するルーマンの理論が取り上げられ、ルーマンに依拠しながら、近代初頭における愛の関与と愛のゼマンティックの歴史的变化が描き出される。そこから、ダブル・コンティジェンシーの先鋭化につれて社会システムの自己言及的性格が顕在化するというルーマンの発想が浮き彫りにされる。さらに、ダブル・コンティジェントな関係を強化する過程で愛のゼマンティックと個性のゼマンティックが補完的な関係をなし、強力なバイナリーコードが機能しえない社会システムのもとでは、ゼマンティックが重要な役割を果たすことが明らかにされる。

第五章にも二つの補論が付されており、補論3「自己言及とバイナリーコード」では、自己言及とバイナリー図式の構造や機能に関する補足的な説明がなされる。そして、本論全体に関する補論となる補論4「オートポイエシス概念の実質的導入およびゼマンティックとしての「福祉」」では、オートポイエシス導入の直前に執筆されたルーマンの論文のなかで、福祉が自己言及的な政治システムのゼマンティックとして機能していることが指摘され、オートポイエシスの概念が実質的に成立していることが示される。

終章「ルーマン知識社会学の方法と歴史」では、以上の考察を踏まえてルーマンの知識社会学的研究の特質に再び言及し、ルーマンの知識社会学的研究が、著者・学派・潮流のような概念によって文化史の変動を記述するのではなく、それと別の方法に従っていること、そしてルーマンの理論が自らの理論をも研究対象の一部として包摂していることが確認される。

ルーマンの知識社会学的研究は、その重要性にもかかわらず、ルーマン研究において十分注目されてこなかった。そうしたなかで、本論文は、近代におけるゼマンティック変動を主題にしたルーマンの知識社会学的研究の内容と方法を詳細に検討し、そのことをとおして、ルーマンの知識社会学的研究がルーマン理論の展開に果たした役割を考察している。本論文は、社会システム論の枠組のなかに位置づけてルーマンの知識社会学的研究を内在的に理解している点で高く評価されるだけでなく、1980年代に生じた「オートポイエシス論の導入」が単なる生物学理論の社会的応用ではなく、近代に対するルーマンの歴史認識に裏打ちされたものであることを明らかにした点でも高く評価できる。本論文がルーマン研究に寄与するところは大きい。

よって本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。